公式主義と屈従のハビトゥス

― 明治初期　福沢諭吉が創造的起業の阻害要因と考えていたもの ―

竹村英二

一

福沢諭吉（1835〔天保6〕―1901〔明治34〕）の『学問のすゝめ』は、1872（明治5）年から1876（明治9）年にかけて刊行された全17編からなる書物である。起業の宣揚をその主旨とする「第五編」（1874〔明治7〕年刊）において、「近来我政府、頻りに学校を建て工業を勧め、海陸軍の制も大に面目を改め、文明の形、略備わりた」る状態であったが、「国の文明は形を以て評す可らず」と述べられている[1)]。官営事業を統括する機関としての工部省が設置されたのは1870（明治3）年であり、鉱山、製鉄、鉄道、電信などの事業が推進せられ、工作機械や蒸気機関の製造技術も含め洋式の工業技術を獲得するためのパイロット・プラントなども設置された。他方、繊維産業と農牧業の振興にむけた官営施設も多数新設された。「官」主導での殖産興業政策により、インフラ整備と先進的外国技術が齎されたが、所謂「私企業」の本格的な発達（明治19―22年頃）が未だ皆無に近い状態であったこの時代に、福沢は、「学校と云ひ、工業と云ひ、陸軍と云ひ、海軍と云ふも、皆是れ文明の形のみ。この形を作るは難きに非ず、唯銭を以て買ふ可しと雖ども、こゝに又無形の一物あり」と云い、その無形の一物は「国人の間に位して其の作用甚だ強く、この物あらざれば彼の学校以下の諸件も実の用を為さず、真にこれを文明の精神と云ふ可き至大至重のものなり」と述べている[2)]。

「蓋し其の物（無形の一物）とは何ぞや。云く、人民独立の気力、即是なり」[3)]。

「独立の気力」、「不羈独立」、「屹立」、「勇力」などの文言に顕われるところの自律性、主体性、抵抗の気概の福沢における主張は、戦中戦後に刊行された丸山真男の一連の福沢関連論文[4)]を端緒に、数多くの政治思想史的研究において既に中心的に取り上げられている主題であり、翻っては近年、坂本多加雄氏によって、福沢の起業者論の基底的要素として論じられている点でもある[5)]。「福沢における『実学』の転回」（1947年刊行）において丸山は、福沢の「実学」の宣揚は、卑俗な現実的功利精神の獲得を叫ぶのみには非ず、「東洋社会の停滞性の秘密」としての「数理的認識と独立精神の欠如」を摘発するものであり、近代化を推進する主体の前提的

素養としてそれらの獲得の必要性を説くものであったことを指摘した。「福沢哲学への序論」である同論文[6]では、人々の倫理行動、認識活動における適合志向と経験的機会主義の蔓延が、社会的位階観を“自然的秩序”として内包せる儒教のイデオロギー的特質理解との兼ね合いのなかで指摘され、同年発刊の「福沢諭吉の哲学——とくにその時事批判との関連」においては、福沢の強調するところの「近代性の前提」としての自律性と主体性、価値判断の相対性と人間精神の主体的能動性との関わり、そしてその阻害要因（或は反対因子）としての公式主義と人間精神の懶惰、思考の惑溺などが考察されている。これら「丸山福沢論」刊行は半世紀以上前であり、現在までに、西洋における所謂「プロ倫」の役割に儒教を準え、その資本主義的エトス醸成と主体性喚起における積極的役割を論じた研究[7]や、江戸中期以降発展をみた経世学（特に折衷学）に顕著な学問的主体性と対社会的能動性を指摘した研究[8]、また、最近では特定の儒者の具体的思想内容に立ち入り、そこに実力者抜擢の重視やmeritocracy、自己推薦尊重の思想を読み取った研究[9]なども成立している。学問的主体性に関する指摘は、上述の丸山論文における儒教世界に蔓延する権威（公式）主義と恭順志向に関する福沢の見解を相対化する。能力主義と競争重視の宣揚は、強固な位階観を所与とするスタティックな社会特性と相容れ難いものであり、“自己推薦”尊重の思想は、適合志向と相反するものですらある。総じて近年の諸研究は、当時の丸山福沢論における儒教の教義的（或はイデオロギー的）特質論とその社会への影響についての見解を覆さぬまでも相対化、一面化するものである[10]。翻って福沢の“儒教元凶説”も、「幕藩制の統治原理」或はその特質との兼ね合いの中で、彼が徳川社会の閉鎖性とそれが人々に提供した思惟範型を指摘したものであると考えられるべきであろう[11]。

これら儒教教義の特質に関する再評価はしかし、福沢が視たところの（当時の人々の）適合志向、経験的機会主義に関する彼の指摘を無効とするものではない。寧ろ、単なるイデオロギー分析、或は儒教教義とその浸透の検証とは異なる次元での、（福沢の問題意識の中核の一つである）人々の思考／行為に顕われる恭順、屈服志向に潜む心理的動因と、自律性・主体性の抑圧原理の構造的理解にむけた新たな分析の枠組適用の必要性を、我々に意識させるものである。また、丸山の福沢関連諸論文は、丸山が同時代的課題に鑑みながら、福沢を自己同一的視点から読み込んだものに過ぎないとする見解[12]も、丸山によって明示された人々の心的傾向に関する福沢の格別なる深慮を否定するものではない。本稿は、「丸山福沢論」に通底する問題意識を礎としながら、ハビトゥスの概念を援用し、福沢が特に創造的起業の基底として重視していた自律性と、その阻害要因としての公式主義、屈従・惑

溺のハビトゥスについて、ヨリ分析的な理解を試みることを課題の一つとする。

二

以下は『学問のすゝめ』第三編の「一身独立して一国独立する事」と題する文にある文言であるが、当時の人民に対して福沢が有していた心的性癖、或いは心的傾向（disposition）といったものへの視線が読み取れる。

「抑も我国の人民に気力なき其の源因を尋るに、数千百年の古より全国の権柄を政府の一手に握り、武備文学より工業商売に至るまで、人間些末の事務と雖ども政府の関らざるものなく、人民は唯政府の嗾する所に向て奔走するのみ。恰も国は政府の私有にして、人民は国の食客たるが如し。（中略）遂に全国の気風を養ひ成したるなり」[13]

そしてその「気風」は、人民の自律性を培う社会的契機を日本の歴史から疎外し、結果、昔日より連綿と続くお上の権限の不可侵性と権威主義に関する暗黙のコンセンサス、ならびに「人民も亦只管無事を欲するの心よりして（中略）唯政府に依頼して（中略）掛り合を遁るゝに忙はし」く[14]する性癖[15]を、人民の日常の意識と習慣において助長したとする。さらに、『学問』第五編においては、

「加之今日に至ては、尚これより甚だしきことあり。（中略）今日本の有様を見るに、文明の形は進むに似たれども、文明の精神たる人民の気力は日に退歩に赴けり。（中略）人皆云はん、政府は唯に力あるのみならず兼て又智あり、我輩の遠く及ぶ所に非ず（中略）我輩は下に居てこれに依頼するのみ、古の民は政府を恐れ、今の民は政府を拝む」[16]

と述べる。

「常に人を恐れ人に諂ふ者は次第にこれに慣れ、其面の皮鉄の如くなりて、恥ず可べきを恥ぢず、論ず可きを論ぜず、人をさへ見れば唯腰を屈するのみ。所謂習、性と為るとは此事にて、慣れたることは容易に改め難きものなり。（中略）平民の根性は依然として旧の平民に異らず（中略）目上の人に逢へば一言半句の理屈を述ること能わず、立てと云へば立ち、舞えと云へば舞ひ、其の柔順なること家に飼たる痩犬の如し。実に無気無力の鉄面皮と云ふ可し。」[17]

人々における殆ど条件反射的諂い癖、屈従、順応の“習い性”化。『学問のすゝめ』においては、これらが夙に指弾される。また、幕末期の藩士、特に上士、幕臣の行為・思考に顕われる公式主義への恭順、屈服（submission）性向が、己れの社会経験を綴った『福翁自伝』において指摘され、『文明論の概略』には「日本の武人は開闢の初より此国に行はるゝ人間交際の定則に従て、権力偏重の中に養はれ、常に人に屈するを以て恥とせず」との文言がみられる[18]。身分の上下を問わず、対人、対制度の両面において、体制の硬直性が醸し出す社会の空気の中での柔順と屈従、価値基準の絶対化志向が日常化し、斯くなる状況下、「目上の人に逢へば一言半句の理屈を述ること能わず」「人をさへ見れば唯腰を屈する」といった心的性癖が蔓延すると謂う。福沢はこれら、社会学の概念としての「ハビトゥス」[19] の次元に属する社会的事象に鋭い視線を注ぐ。

ハビトゥスの理論体系を用いて、ブルデューが行った如くの社会学的な、人間の社会化過程の動態研究にあたるような解析作業を、歴史学の分野において、史料を用いてのみ行なうことは困難である。また、純粋理論は、研究対象・題材に内在する（特に場所的、時間的）特殊性を理論（の普遍性）に呑み込み、経験的（実証的）特殊性を忘却させがちであることは、ブルデュー自身注意を怠らぬところである[20]。しかし、「ハビトゥス」の概念をもってブルデューが射程とするところの事象は、福沢が多くの主著において夙に視線を投げかける人々の心的性癖、心的諸傾向に相応ずるところであり、同概念の照射する範囲を意識しながら福沢の言説を読み解くことは、彼の問題意識と論点をヨリ明瞭化し整理するにおいて有効であると考える。

ハビトゥスとは、持続性をもち、移調が可能な心的諸傾向のシステムであり、構造化する構造として各々の有機体（社会的人間）のなかに、知覚、思考、行為のシェーマとして定着しているものである。或る環境世界で働く（機能する）文化の再生産過程において、そこに属する人間によって殆ど無意図的におのずと修得・実践される、身体化された歴史・社会的行為、更にはそれを可能せしめる態度ならびに能力である。さきの『学問のすゝめ』において福沢は、「昔鎖国の世に舊幕府の如き窮屈なる政を行ふ時代なれば、人民に気力なきも其政事に差支へざるのみならず却て便利なるゆえ、故さらにこれを無智に陥れ無理に従順ならしむるを以て役人の得意と」していた[21] と論じ、幕政における恭順志向助長にむけた制度的、慣習的諸作為によって生成された「社会場」が、“痩せ犬の如き”従順さを人々のうちに身体化させ、その無意図的修得・実践を助長したと考えている。「人民の気力なき其の源因」は「人間些末の事務と雖ども政府の関らざるものな」かった歴史ならびに社会的（「場」的）状勢故であり、これが、「国の食客たるが如」くに「唯政府に

依頼」せることを殆ど所与の渡世術とする心性を、人々において思考、行為のシェーマとして定着させた要因の一つであったとする。支配と恭順の客観的構造による、その主観化を指摘したものである。同時に、

「学者なるもの時勢に付き眼を着すること高からざるか、或は国を患ること身を患るが如く切ならざるか、或は世の気風に酔ひ只管政府に依頼して事を成す可きものと思ふか（中略）官途に赴き、些末の事務に奔走して徒に身心を労し、其挙動笑ふ可きもの多しと雖ども、自からこれに甘んじ人も亦これを怪まず、甚しきは野に遺賢なしと云てこれを悦ぶ者あり。」[22]

と述べる。即ち、志低く国の行く末などを我が身のこととして考えることをせず、「其挙動笑ふ可きもの多し」些末なルーティーンで自らを忙殺し、事勿れのみを願うことを殆ど無意図的に実践する行為構造が醸成されるに至ったと、福沢は指弾しているのである。それにしても、なぜに福沢は、公式主義と屈従のハビトゥスを、斯くも激烈なる表現をもって糾弾するに至ったのであろうか[23]。

三

『学問のすゝめ』第三編の「一身独立して一国独立する事」と題する項において福沢は、「譬へば田舎の商人等、恐れながら外国の交易に志して横浜などへ来る者あれば、先づ外国人の骨格逞しきを見てこれに驚き、金の多きを見てこれに驚き（中略）其掛引のするどきに驚き、或は無理なる理屈を云掛けらるゝことあれば啻に驚くのみならず其威力に震ひ懼れて、無理と知りながら大なる損亡を受け大なる恥辱を蒙ることあり。こは一人の損亡に非ず、一国の損亡なり」と述べている[24]。対外交渉における屹立は、維新前後における外交の直接的担当者のみならず一般市民にも課された責務であり、蔓延するハビトゥスの次元での柔順と屈従癖の払拭が、国の存続の如何に直結する問題であると福沢は考えていた。また、『学問』第五編では、「非常の勇力」をもっての、「官」に頼らない「私立での起業」が宣揚され、独立の勇力の反対因子としての恭順志向が厳しく糾弾されている[25]。福沢の意識はしかし、対外応接や起業における自律性のみに傾注されていたわけではない。

かつて丸山真男は、福沢における価値判断の相対性の強調は、人間精神の主体性能動性の尊重とコロラリーをなすと指摘した[26]。「「場」に制約せられた価値基準を抽象的に絶対化してしまい（中略）基準の実践的前提が意味を失った後にも、是を金科玉条として墨守する」ことは「人間精神の懶惰を意味する」ものであり、福

沢が「惑溺」と呼ぶ現象である[27]。「個別的状況に対して一々状況判断を行い、それに応じて一定の命題乃至行動基準を定立しつつ、しかもつねにその特殊的パースペクティヴに溺れることなく、一歩高所に立って新しき状況の形成にいつでも対応しうる精神的余裕を保留」すること[28]の肝要に関する福沢の主張を端的に指摘したものである。更に注視すべきは、福沢は、独創性、工夫発明の力などといった起業活動の基底的要素は、個々人の自律的状況判断力ならびに行動基準の定立力をその基底とするものであると主張している点である。

「工夫発明、先づ一人の心に成れば、これを公にして実地に施すには私立の社友を結び、益其（ますますその）事を盛大にして人民無量の幸福を万世に遺すなり。此の間に当り政府の義務は、唯其の事を妨げずして適宜に行なわれしめ、人心の向ふ所を察してこれを保護するのみ。」[29]

蒸気機関のJ. Watt、蒸気機関車のG. Stevenson、紡績機のR. Arkwrightなど、英国の発明家の事例を念頭に[30]、「工夫発明、まず一人の心に成」ることに始まるところを指摘する。独創の不可欠的素養としての独立孤高の指摘である。

「国の文明は上政府より起る可らず、下小民より生ず可らず、必ず其中間より興て衆庶の向ふ所を示し、政府と並立て始て成功を期す可きなり。西洋諸国の史類を案ずるに、商売工業の道一として政府の創造せしものなし、其の本は皆中等の地位にある学者の心匠に成りしものゝみ。（中略）（起業家活動、発明、発見などを行なった）諸大家は所謂「ミッヅル・カラッス」（middle class）なる者にて、国の執政（大臣）に非ず、亦力役の小民に非ず」[31]

文明化の起動因・触媒としての中産階級の役割については、今日の産業起源に関する社会特質論的、人口学的所見を持ち出すまでもないことだが、注視すべきは、商工業の発展が、国政を司る政治家、官吏ではない位置の人民、社会的、経済的、精神的自律性をその最大の特徴とする「中等の地位にある学者」の、その「心匠に成りしもの」、ミッヅル・カラッスの「一人の心」に「自律的に成る」工夫発明に依るものであるとされ、自律的熟慮と状況判断力は、創造と工夫発明の基底であることが力説されている点である。

「一度び物理を発明してこれを人に告れば、忽ち一国の人心を動かし、或は其発

明の大なるに至ては、一人の力、よく全世界の面を一変することあり。『ゼイムス・ワット』蒸気機関を工夫して世界中の工業これがために其趣を一変し、『アダム・スミス』経済の定則を発明して世界中の商買これがために面目を改めり。其これを人に伝るや、或は言を以てし或は書を以てす可し。」[32]

しかし、

「古来文明の進歩、其初は皆所謂異端妄説に起らざるものなし。『アダム・スミス』が始て経済の論を説きしときは世人皆これを妄説として駁したるに非ずや。『ガリレヲ』が地動の論を唱へしときは異端と称して罪せられたるに非ずや。異説争論年又年を重ね、世間通常の群民は恰も智者の鞭撻を受て知らず識らず其範囲に入り、今日の文明に至ては学校の童子と雖ども経済地動の論を怪む者なし。（中略）昨日の奇説は今日の常談なり。然ば即ち今日の異端妄説も亦必ず後年の通論常談なる可し。学者宜しく世論の喧しきを憚らず、異端妄説の譏を恐るゝことなく、勇を振て我思ふ所の説を吐く可し。」[33]

独創的工夫発明ならびに思考／行為は、その端緒において常に異端妄説視されがちであると福沢は謂う。そして、異端を可能せしめる心的態度は、自律性と不可分であるが、公式主義と前例志向、それらが齎すところの過度の恭順・屈服志向は、この自律性を阻害する。福沢が前例志向と恭順のハビトゥスを糾弾する所以である。

四

福沢は、体制内にいながらも、これを客観視し得る環境に育った人間である。福沢の生育過程については既におびただしい数の文献に明らかであり、本稿での詳述は割愛するが、彼は豊後国の小藩の下士の家に生れた。藩の元締役を勤めていた父親の職務の関係で、福沢家は長らく大阪に居住していた［福翁自伝］が、父親の死後帰省した中津は、「交際、朋友互に交つて遊ぶ小供遊の間にも、ちやんと門閥と云ふものを持て横風至極」[34] な土地であり、大阪との言語的、教育環境的、そして社会規範的相違から「私共の兄弟五人はドウシテも中津人と一所に混和することが出来ない」[35] 状況に置かれていたと、『自伝』で述懐している。長じて洋学を修得し、翻訳業などを通じて幕府関係の実務に携わるようになった後には、「何分にも外辺ばかり」で、「物事を緻密に考へる脳力もなければ又腕力も弱さうに見える」幕臣が、「今時の人に想像出来まい」ほどの剣幕で譜代藩士に対し威張り散らす様にも尋常でない反発を感じていたようである[36]。譜代の家来など「人種違ひの蛆蟲

同様」に考える幕人の心的態度を目の当たりにしたことは、能力上の優劣に無関係の序列の横暴と、その底流にある公式主義と価値判断の絶対主義、さらには人民の殆どがそれを所与とする、即ち惑溺することに対する強烈な反感を培ったといえる。また、福沢は、「少年の時から中津の藩を出て仕舞たので、所謂藩の役人らしい公用を勤めたことがな」く、後の幕府への出仕も、「是れは云はゞ筆執る翻訳の職人」としてであった[37]。さらには長崎遊学と適塾での蘭学研磨、江戸に出てからの英語の修得などを通じて不可欠な知識と技能を確と身につけたことは、社会的、経済的、精神的自律性をその最大の特徴とする「中等の地位にある学者」に類似せる社会的位置を福沢に確保せしめたのである。然して福沢は、体制を自己同一的に看取することが可能な立場にいながらもこれを相対化し、ある距離感をもって己れの属する体制を眺め得る位置にあったのであり、これ故の自律性を福沢自身が確保し、体制に生きる人民に巣食う思考・行為形式の懶惰を客観的に看取し、透視し得ることを可能にしたといえる。

以下、『文明論の概略』巻之一からの文言であるが、体制の思考の惑溺と、そのハビトゥスが自律的判断を阻害することに対する透徹した視線を物語る。

「凡そ事物の便不便は其ためにする所の目的を定るに非ざれば之を決し難し。屋は雨露を庇ふがために便利なり、衣服は風寒を防ぐがために便利なり。人間百事皆ためにする所あらざるはなし。然りと雖ども、習用の久しき、或は其事物に就き実の功用をば忘れて唯其物のみを重んじ、これを装ひ、これを飾り、これを愛し、これを眷顧し、甚しきは他の不便利を問はずして只管これを保護せんとするに至ることあり。是即ち惑溺にて、世に虚飾なるものゝ起る由縁なり。」[38]

「人間百事皆ためにする所あらざるはな」く、「凡そ事物の便不便は其ためにする所の目的を定るに非ざれば之を決し難」いものである。しかし福沢は、「習用の久しき」状況が継続するにおいて、「其事物に就き実の功用をば忘れて唯其物のみを重んじ」る傾向、「甚しきは他の不便利を問はずして只管これを保護せんとする」性癖が横行するに至り、結果、すでに既成の事実あるいは概念となっている諸事項、諸慣習に惑溺するのみのハビトゥスが浸透したとする。

「譬へば戦国の時に武士皆双刀を帯したるは、法律の頼む可きものなくして人々自から一身を保護するのためなりしが、習用の久しき、太平の世に至ても尚この帯刀を廃せず、常に之を廃せざるのみならず、益この物を重んじ、産を傾けて双

刀を飾り、凡そ士族の名ある者は老幼を問はず皆これを帯せざるはなし。然るに其実の功用如何を尋れば、刀の外面には金銀を鏤めて（中略）加之剣術を知らずして帯刀する者は十に八、九なり。（中略）世人皆双刀の実用を忘れて唯其物を重んずるの習慣を成したればなり。其習慣は即ち惑溺なり。今太平の士族に向て其刀を帯する所以を詰問せば、其人の遁辞には是れ祖先以来の習慣なりと云ひ、是れ士族の記章なりと称するのみにて、必ず他に明辨ある可らず。」[39]

そして、「其趣を変じて実の功用のみを取るも可（なれども）」[40]、実際の効用に鑑みて思考し、判断し行動することをしない。さきの丸山の文言に準えていえば、「価値基準を抽象的に絶対化してしまい（中略）基準の実践的前提が意味を失った後にも、是を金科玉条として墨守する」のみである。この思考の惑溺、如何なるものであろうか。われわれは再びここで、ハビトゥスの概念を想起せざるを得ない。ブルデュー曰く、「社会的空間の中で限定されたひとつの位置（つまりは特定の身分、社会集団など）に付着する社会的諸規定は、自分自身の身体への関係を通じて、それぞれの同一性を構成する心的傾向（disposition）を、そして、適性をも作り上げる」ものである[41]。思考のかたち、或いは身体の動かし方と、社会的意味作用あるいは社会的価値を重ね合わせることは、身体的空間と社会的空間およびこの両空間における移動の間の等価性感覚を教え込む。前例を所与とする心的傾向が、持続性をもち、移調可能なシステムとして無意図的に修得・実践され、社会的構成員のうちに心的傾向の同一性、適性として確保され、社会的空間と身体との間における等価性感覚の発達が促される。「習慣久しきに至れば第二の天然と為り、識らず知らずして事を成す可し」[42]との福沢の文言は、ハビトゥス次元での同一性構成を指し示す。そしてこれらが、各人が社会的・時代的機能や適合性に鑑みて有用性を定め、目的意識を確立すること、それを客観的に覚知しフィージビリティーを検証すること、そして、それらを可能せしめる自律性といった、いわば起業の基底的要素を喪失せしめていたという事実を、福沢は指摘する。

幕府内の日々の職務遂行過程における、惑溺故の奇異なる意志決定メカニズムも実に詳らかに見えたことを、以下の翻訳業務におけるエピソードをもって物語る。

「私がチェーンバーの経済論を一冊持て居て、何か話の序に御勘定方の有力な人、即ち今で申せば大蔵省中の重要の職に居る人に其経済書の事を語ると、大造悦んで、ドウカ目録だけでも宜いから是非見たいと所望するから、早速翻訳する中に、コンペチションと云ふ原語に出遭ひ、色々考へた末、競争と云ふ訳字を造り出し

て之に当箝、前後二十條ばかりの目録を翻訳して之を見せた所が（中略）『イヤ茲に争と云ふ字がある、ドウも是れが穏かでない、ドンナ事であるか。『どんな事ッて是れは何も珍らしいことはない、日本の商人のして居る通り（中略）互に競ひ争ふて、ソレで以てちゃんと物価も定まれば金利も極まる、之を名けて競争と云ふので御座る（と説明すると）、『成程、爾う云へば分らないことはないが、何分ドウモ争ひと云ふ文字が穏かならぬ。是れではドウモ御老中方へ御覧に入れることが出来ないと、妙な事を云ふ（中略）、ドウモ争ひと云ふ字が御差支ならば、外に翻訳の致しやうもないから、丸で是れは削りませうと云て、競争の文字を真黒に消して目録書を渡したことがある。此一事でも幕府全体の気風は推察が出来ませう。」[43]

この翻訳業務における顚末にも顕われているが、「行為者は自分のハビトゥスの知覚・評価図式を通して対象を把握」するものである[44]。換言すれば、行為者の慣習行動の分布上の特性は、（行為者の属する「場」において構造化する／されるところの）「履歴現象効果」に比例しながら、分布状況の過去における状態によって決まる部分が大きい[45]。勘定方の要人は、「争ひと云ふ文字が穏かならぬ」という理由で、そしてそれが、「御老中方へ御覧に入れることが出来ない」との理由で、訳語の精確な意味を伝達することを拒否する。「此一事」で福沢が描写するところは、幕臣的履歴の蓄積が齎すところの自律的判断力の欠落であり、判断の合理性における機能不全である。

ハビトゥスは、「慣習行動および慣習行動の知覚を組織する構造であると同時に、構造化された構造でもある。なぜなら、社会界の知覚を組織する論理的集合への分割原理とは、それ自体が社会階級への分割が身体化された結果であるから」である[46]。帯刀の習慣未だ止まぬに顕われるところの思考停止のさま。幕臣の判断に顕われる公式主義と判断の硬直性。これらは、公式（主義）と前例へのsubmissionであり、恭順、屈服志向の具現である。いくら「文明の形、略備わりた」るとも、知覚、思考、行為のシェーマとしてこれらが定着し続ける限り、文明の諸々の利器は「実の用を為さ」ないと福沢は考えていたのである。

小括

『学問のすゝめ』第五編が刊行された1874（明治7）年は、未だ私企業の発達をみない時期であり、有業人口総数の約四分の三が農林業人口で占められていた時代であった[47]。同時代における未知なる国々との交易、未知なる産業分野への進出には、

「非常の勇力」と「独立の気力」が不可欠であったことは謂うまでもない。さらには、既存の思考、判断基準、既知の知識が通用しないフロンティアにおいて必要なのは、自律的判断力と行動基準の定立力であり、それを基底とした事業の実際における思考、行動の独自性、工夫発明における独一個の個性であった。心的性癖としての公式主義と前例志向、それが齎す自律的判断力の欠落、官尊民卑のハビトゥス。そして、恭順原理の社会関係への浸透に起因する人々における屈従癖と諂い癖の蔓延。福沢が腐心したのは、創造的起業の基底的諸相の阻害因子であるこれらの心的事象の払拭である。

明治初期の官営事業中心の殖産興業政策は、インフラ整備の進展と先進的外国技術の早期導入を可能にしたが、やがて大きな財政負担と貿易赤字を招いた。また、外来技術の“直訳的”移植は、在来産業の発展と相容れない事態を多く招いたと同時に、官業の非効率性も目立っていた[48]。政府はやがて、民業育成を主軸とした産業政策を中心とした施策への転換を余儀無くされていった。士族と商人出身者を中心とする人口層が起業をリードし、明治十年代の後半ぐらいからは民間企業の発展にも一定程度の進歩がみられた[49]。『学問のすゝめ』第五編（明治7年刊）も含めた福沢の言論がどの程度影響したかは別儀検討の余地があるが[50]、明治20年代はじめ位までには、彼が同書で執拗に提唱した「私立での工業化、産業発展」が、一応の進展をみたといえる。

一方で、1887（明治20）年10月28日の『時事新報』は「御用商人」と題する論述であるが、以下の文言がみられる。

「本来此種（御用商人＝政商）の商人等が窃に政府の筋の勢力を借り、其蔭に倚りて経営すれば、事は甚だ易くして安全に利益を得べきが如くなれども、利を争ふの人間世界に居て商売経営は至極艱難なる可き筈なるに、其艱難を見ずして、得るに難きの利益を容易に博するは、即ち商売上の大義に戻りたる道理外の奇相なれば、固より永久す可きものにあらず。若しも斯る理外の商法をして永遠に行はれしめなば、遂には我商売社会の気風に腐敗を催ほし、其禍は日本全国の理財に波及して復た救ふ可らざるに至る可し。（中略）既に容られたる上にも常に鼻息を窺ふて、恰も他人の心の晴雨を卜し、一晴一雨、我喜憂の種子となる、其心事の不安にして忙はしきは如何ばかりなる可きや。銀行諸会社の重役は其本職を勉強して他事なかる可しとは素人の考にして、其内実を云へば本行の財を理するよりも、官邊の首尾を理するの法を講究せざる可らず。（中略）故に我輩は敢て執念深く既往を問ふ者にあらざれば、唯今年今日より商人諸氏の心事を改め、純

然たる独立の商人と為り、間接にも直接にも態と官の蔭に倚らずして一家一社の業を営み、日本政府の商人と為らずして日本国の商人と為らんことを冀望に堪へず。」[51]

「常に鼻息を窺ふて、恰も他人の心の晴雨を卜し、一晴一雨、我喜憂の種子となる、其心事の不安にして忙はしき」様は、13年前に『学問のすゝめ』第三編において熱弁していた「人をさへ見れば唯腰を屈する」習性、痩犬の如く柔順なるハビトゥスそのものである。「銀行諸会社の重役」が「其内実を云へば本行の財を理するよりも、官邊の首尾を理するの法を講究」する姿は、「只管政府に依頼して事を成す可きものと思ふか」、「官途に赴き、挙動笑ふ可きもの多き些末の事務に奔走して徒に身心を労」する心性の吐露である。福沢は、所謂政商の思考／行為構造のうちに志低き有り様を認めたのであり、ここに、些末なルーティーンで自らを忙殺し、事勿れのみを願う惑溺体質の再来を認め、指弾しているのである。

尤も、維新後、無からの起業の多くを担っていった下級武士の思想と行為は斯く非ずであったし、新政府において近代化努力を担ったのも、この層の自律性と能動的行動エネルギーであった。福沢が青年期を過ごした幕末〜維新期は、特に下級士族と民衆の一部において、自律性、抵抗精神と能動的行動エネルギーの発露が顕著にみられた時期であった。しかし、個別事例研究が指し示す如くの闊達なる行動エネルギーとは裏腹に、一方では、旧習と前例主義、公式主義に惑溺し、時代適合的に思考し行動する術を身に付けずに右往左往していた人民が、社会の各階層に大量に存在していたのである。更に、維新の推進と新政府の樹立は、主に下級武士によって齎されたが、その能動性が一旦権威を確立すると、“その他大勢”はそれに依拠せんとするか、または官途に入ろうとする。さきの『時事新報』「御用商人」における福沢の言説には、いつまでたっても、「一人の心」に「自律的に成る」工夫発明に立脚せる独立個人としての起業家が成立し、それが発展的に継承され続け、その結果として（経済）社会が形成されるという状況に収束しない近代日本社会への、彼の苛立ちが顕われているといえる。

福沢がしばしば、トックヴィル、ギゾー、そしてウェイランドの『修身論』などを用いて、“西洋的”独立精神を喧伝していたのは、これらのハビトゥスを払拭し、独一個の精神、自律性といった素養——そしてこれは、起業の基底的素養でもある——を醸成する必要性を痛感していたからに他ならない。その一方で福沢は、自律性、独立心、大勢意見への抵抗精神、能動的行動エネルギーを醸成する方法として、西洋思想（或はエトス）の継ぎ木的移植のみを考えていたわけではない。彼は、武

士が培ってきた素養、とりわけ下士のそれに着目していたのである。この点については、稿を改めての周密な議論を試みたい。[52)]

本稿における福沢の論著はすべて、慶応義塾編纂（小泉信三監修、富田正文・土橋俊一編集）、『福沢諭吉全集』（全22巻、再版）、岩波書店、1969—71年、からの引用である。「註」では、福沢の著作は以下の略称を用いる。

『学問のすゝめ』—『学問』

『文明論之概略』—『文明論』

『福翁自伝』—『自伝』

『時事新報』—『時事』

福沢の著作、文言等の出典の記載は、以下の如くに略す。

例：福沢諭吉、『学問のすゝめ』第五編（慶応義塾編纂『福沢諭吉全集』第3巻、58頁）=『学問』第五編（集3、58頁）。

1．『学問』第五編（集3、58頁）。

2．同（集3、58頁）。

3．同（集3、58頁。

4．丸山は1940年代を通じて、「福沢諭吉の儒教批判」（1942年）、「福沢における『実学』の転回」（1947年）、「福沢諭吉の哲学　—　とくにその時事批判との関連」（1947年）などの論文を発表した。（「儒教批判」論文は『丸山真男集』（全16巻・別巻1、1996—7年、岩波書店、以下、『丸山集』と略す）第2巻に、「実学」論文、「哲学」論文は『丸山集』3に収録。）　その一方で、「福沢における秩序と人間」といった論考や、福沢を主要な登場人物の一人とする「明治国家の思想」、「近代日本思想史における国家理性の問題」などの論文も、この時期に手掛けられている。当時の丸山は、「日本ファシズム関係の分析、ラスキやラッセルなど西洋の思想や政治理論に関する論文、戦前の日本政治学への批判、明治思想史関係の論文など、多少とも現代の問題に関わる論文を矢継早に発表し」、「そうした多岐にわたる丸山の知的作業の一環をなすもの」として、福沢の論文も位置づけられる。［平石直昭『丸山真男著「福沢に於ける『実学』の転回」』（福沢諭吉協会読書会、2002年6月1日、15日開催）のレジュメより引用。］
福沢の「独立自尊」「独一個人の気象」といった主張は、丸山の初期諸論文のみならず、40年余りを経た後の1986年刊『「文明論之概略」を読む』、さらには、福沢研究そのものではないが、「忠誠と反逆」（家永三郎、隅谷三喜男、丸山他編『近代日本思想史講座6　自我と環境』〔筑摩書房、1960年〕、『丸山集』8に所収）などにおいても一貫して通底的中心的に取り上げられている。

5．坂本多加雄氏は、近著『新しい福沢諭吉』（講談社現代新書1382、1997年）におい

て、「福沢が理想とするところの、『世論』に抗しながら、『勇気』をもって『異端妄説』を唱える『独一個人の気象』を有する人物は、そのまま、シュンペーターのいう『企業者』のイメージに重なり合」うものであるとする（同書、162頁）。『経済発展の理論』においてシュンペーターが提唱する「ひとりで衆に先んじて進み、不確定なことや抵抗のある事を反対理由と感じない能力」を、福沢の『士人処世論』にある「艱難に堪るの勇気」、「機に臨み変に応ずるの智略」といった文言（同書167―8頁に引用）と照合し、「確立された『慣行』に従って事業を営む」のとは異なる、「新製品の開発、新しい生産方法、新しい販路の開拓、新たな原料供給源の獲得、新しい組織の実現という、いわゆる『新結合』を行」い、「静態的な経済の循環に『革新』をもたらし、いわゆる『創造的破壊』を通して」、従来の経済過程に大きな変動を与える」事業主体像の、両者におけるオーバーラップを指摘する。福沢の「独立自尊の精神」の強調は今更謂うまでもないが、シュンペーターの起業者論に準えての福沢の「独一個人の気象」への視線の指摘は、注目すべき点であるといえる。

6．丸山、前掲「福沢諭吉の哲学――とくにその時事批判との関連」（『丸山集』3）、163頁にある丸山自身の文言。

7．古くは Bellah, R.N., Tokugawa Religion, The Free Press, New York, 1957。また、ヒルシュマイヤーはじめ、多くの経営理念史研究者の論考も、儒教教義の積極評価を呈するものが多い。他に、日本の経済発展と儒教教義に関する考察ではないが、余英時『中国近世の宗教倫理と商人精神』（平凡社、1991年）がある。

8．この点に関しては特に、辻本雅史「十八世紀後半期儒学の再検討　―　折衷学・正学派朱子学をめぐって」（『思想』766号〔1988年4月〕）を参照。また、江戸中期以降の朱子学の学統多様化・併存の状況については、衣笠安喜『近世儒学思想史の研究』（法政大学出版局、1976年）に詳しい。

9．例えば坂本慎一「初期渋沢栄一における株式会社提唱への道程――儒教思想を基軸とした解釈の試み」（日本経済思想史研究会編『日本経済思想史研究』第2号、2002年3月）は、特に韓愈の人材抜擢論、自己推薦尊重の思想などの、渋沢への影響についての分析を試みたものである。

10．もっとも、「福沢諭吉の儒教批判」論文は、福沢が、徳川社会の閉鎖性の元凶として儒教的教義とその世界観を糾弾するのに準拠するかたちで、丸山が論旨を展開しているものであり、丸山の儒教観を代表するものではない。

11．本稿で引用した福沢の言説、特に註10、13、21にある文言は、これを示唆するものである。

12．例えば安川寿之輔『日本近代教育の思想構造』（新評論、1970年）。服部之総『明治の思想』（『服部之総著作集』〔理論社、1955年〕、第6巻）。

13．『学問』第五編（集3、59頁）。

14．『文明論』巻之二（集4、79頁）。

15．『文明論之概略』巻之二は、「第四章　一国人民の智徳を論ず」ならびに「第五章前論の続」からなる。その後半部分は、「独一個の気象」をもって「公」「国」を考え、自律的思惟の力をもって議論闊達にすべきとの論で占められている。自律的個

人と、自律性故の智力をもっての多事争論が謂われるが、その反対因子として、社会に蔓延する習慣としての、お上の権限の不可侵性と権威主義に関する暗黙のコンセンサス、それが助長するところの恭順・屈服志向の蔓延がしばしば指摘される。

16. 『学問』第五編（集3、59—60頁）。
17. 『学問』第三編（集3、45—46頁）。
18. 『文明論』巻之五（集4、165頁）。
19. 仏の社会学者ピエール・ブルデューは、社会、歴史は、2つの次元で存在するという。即ち、(a) 法律、制度等において、また、それが図表・書物などにおいて表れるかたちにおいて。つまり、“モノ化”した次元における存在としてである。そして、(b)「ハビトゥス」という形で身体化されたものとしての存在の仕方である。無論、(a) は (b) を体現・執行する行為者（社会的人間）を、その行為者が生き、社会過程を形成し続ける限り影響を与え続けるものであり、また逆に、制度、法など (a) も、行為者によって実働せられてはじめて実体化し、継承せられるものであれば、両者は相互規定的である。また、「行為者」は、(1) 社会・歴史の採入・再生産プロセスを履行するにおいて、(2) それを履行し、社会過程を共に形成する他者との間主体性が（社会生活において）前提であるという意味において、社会・歴史的には「独立個人」ではありえない。これらの限定の上、ハビトゥスとは、“身体化”された次元での社会、歴史、または主観的構造となった客観的構造である。それは、過去の諸経験の動的な現存を確かなものとし、時間を通じての実践と一致と一貫性を保証するものであり、さらには実践と表象の産出、組織化の原理として機能する素性をもった、構造化された構造でもある。
尚、ハビトゥスの概念の詳細と、その理論体系の全体像については、以下を参照されたい。P.ブルデュー「構造、ハビトゥス、実践」、ブルデュー『実践感覚』I（みすず書房、1988年）。ブルデュー『ディスタンクシオン』I（藤原書店、1990年）、とくに第3章「ハビトゥスと生活様式空間」。加藤晴久編『ピエール・ブルデュー超領域の人間学』（藤原書店、1990年）。
20. 例えば、ブルデュー、前掲『ディスタンクシオン』I、第3章や、ブルデュー『社会学の社会学』（藤原書店、1991年）の第Ｉ章において彼は、純粋理論の有効性の限界への深慮を露わにしている。しかし、「純粋理論は、じっさいには社会構造あるいはその変化の状態を記述するための有効性をまったくもちあわせていません」（『社会学の社会学』第Ｉ章、68頁）と述べる一方、データ偏重の経験的研究はそれを支える理論をもたず、「経験的根拠のある理論」の構築の重要性を説いている。ハビトゥス理論の構築も、このような意図を根底とするものであることは、ブルデューの一連の著作の性向にも明らかなところである。
21. 『学問』第三編（集3、46頁）。
22. 『学問』第五編（集3、61頁）。
23. 『文明論之概略』は1875（明治8）年刊であるが、同書の巻之一「第二章　西洋の文明を目的とする事」と題する論考のはじめの部分において、文明の発達度を「三段に区別して其有様を記」している。そこでも、例えば交通・通信インフラ整備の度合、工業化の発達度、或は政治制度、法整備の発展などについてではなく、人々の

心的性癖に関する事象に注意が注がれている。日本の位置する「第二」段階の社会においては、「人間交際に就ては猜疑嫉妬の心深しと雖ども、事物の理を談ずるときには疑を発して不審を質すの勇な」き人多く、「新に物を造るの工夫に乏しく、舊を修るを知て舊を改るを知らず」、「習慣に厭倒せられて規則の体を成さず」「半開と名く」状態の社会である描かれており、『学問のすゝめ』において述べられていた如くの「唯腰を屈するのみの習い性」、「国の食客たるが如」き人民の「人に逢へば一言半句の理屈を述ること能わず、柔順な無気無力」が蔓延していると描かれている。

24. 『学問』第三編（集3、46頁）。
25. 『学問』第五編（集3、57—62頁）。
26. 丸山、前掲「福沢諭吉の哲学——とくにその時事批判との関連」（『丸山集』第3巻、177頁）。
27. 同、177頁。
28. 同、177頁。
29. 『学問』第五編（集3、60—61頁）。
30. 同（集3、60頁）。
31. 同（集3、60頁）。
32. 『文明論』巻之三（集4、90頁）。
33. 『文明論』巻之一（集4、14—15頁）。
34. 『自伝』（集7、20頁）。また、中津藩の閉鎖性については福沢『舊藩情』（集7、261—80頁）を参照。
35. 同（集7、7頁）。
36. 『自伝』（集7、146—47頁）。
37. 同（集7、151頁）。
38. 『文明論』巻之一（集4、33頁）。
39. 同（集4、33頁）。
40. 同（集4、33頁）。
41. ブルデュー、前掲『実践感覚』I、115頁。
42. 『文明論』巻之二（集4、79頁）。
43. 『自伝』（集7、148—49頁）。
44. ブルデュー、前掲『ディスタンクシオン』I、319頁。
45. 同。
46. 同、263頁。
47. 東畑精一、宇野弘蔵編『日本資本主義と農業』（岩波書店、1959年）、57頁。
48. 西川俊作、阿部武司編『産業化の時代』上（『日本経済史』4、岩波書店、1990年）。西川俊作、山本有造編『産業化の時代』下（『日本経済史』5、岩波書店、1990年）。宮本又郎『企業家たちの挑戦』（『日本の近代』11、中央公論新社、1999年）。
49. 明治前期における起業家の出身背景を分析した業績に、浅野俊光「明治〔実業家文献〕よりみた企業家の分析　—　出身背景と行動様式の一考察」、（『経営史学』14—3）がある。これによると、人口の割合では圧倒的に少数である士族と商人層か

ら、実業家が多数輩出されている。また、士族のうちでは「中下層」（幕府の御家人、中上層に含まれない、石高（表高）50石未満の士族—注22）が実業家を最も多く排出する人口層となっている。

50. 福沢は、執筆、講演活動等様々な論著を通して「私立での起業」を呼び掛けたほか、慶応義塾生を起業家として薫陶する努力も鋭意推進した。福沢の言論活動と起業の実際との相関関係に焦点をあてた研究に、『福沢山脈』がある。また、石井寿美世「1880年代における実業思想と地方企業家　—　長野県東信地方と下村亀三郎を例として」（日本経済思想史研究会　第13回全国大会〔2002年6月9日〕報告、日本経済思想史研究会編『日本経済思想史研究』第3号〔2003年4月〕掲載予定）は、福沢門下の地方企業家の動向の詳細を描いた研究である。

51. 「御用商人」、『時事』1887（明治20）年10月28日（集11、393—95頁）。

52. 拙稿『福沢諭吉の言説に顕われたる『士族の気風』ー心的自律、抵抗精神、胆力の自生的基底として』（比較法史学会編『比較法史研究ー思想・制度・社会』11、未来社、2003年）参照。